

ベンガルにおける土地所有制の 展開と地域性

中 里 成 章

1. はじめに

今日は時代を18世紀から19世紀に限定して話をさせていただく。私は歴史をやっているので、ベンガル全体を対象にして仕事をしている。しかし、現状分析をされる方は、バングラデシュ、あるいはインドの西ベンガル州ということで仕事をされることが多いと思う。ベンガルという地域は1947年に、当時「政治的生体解剖」といわれたような形で分割された。当時はいずれ一つになるだろうという考え方があったが、意外に安定して現在に至っている。したがって、バングラデシュについて、独自の地域性があるかないかということも考えなければならない時代に入ってきているといえる。ベンガルの場合、地域というのは何であるか、政治的な領域に関してさえ現在問題を含んでいる状態である。そのうちに、バングラデシュの歴史を書く場合、ベンガル全体を書くのかどうかということが問題になるのではないと思われるような状態にある。ただ私は今日この場で、「地域とは何か」という問題を提起するつもりは全くなく、発展と地域性ということで話すことにしたい。

地域性ということだが、これを定義するのは難しい。さしあたり、1世紀なり2世紀なりのタイムスパンを取って、その期間ある程度持続している構造、パターンが見られれば、これを地域性と呼んでしまおうという考えで、この場に臨んでいる。つまり、例えば私が専門にしているベンガルの土地所有制の発展の過程に、1,2世紀にわたる持続的な構造やパターンが認められれば、それをベンガルにおける発展の地域性の一つの現れと見ることにする。

さて、今日問題にする18,19世紀という時期をインド史ではどう見るべきなのか。インドの「近世」の時代区分に関する最近の研究動向に即して、大雑把な見通しをつけておきたい。最近国際貿易に関する、特にインド洋貿易に関する研究が非常に進展してきた。従属論からウォーラステインの世界システム論へ至る最近の社会経済史の研究の動向には、産業資本の展開というより、商業資本、流通過程重視という流れがある。そういう流れの中で、インドにおける近世の経済発展を非常に高く評価する論調が生まれてきている。大きくまとめれば、16世紀以来ヨーロッパからアフリカ、東南アジア、中国等を含めて国際的な貿易網が形成される。インドはその焦点の一つであった。最近の研究動向の特質は、これを単に外国貿易が発達したと捉えるだけでなく、インドの内部経済、および政治体制にも影響を及ぼしたと考えるところにある。商業資本が発展し、農村へ貨幣経済が浸透し、農村で商品作物の栽培が盛んになり、手工業が発展するというようにである。さらにこういう近世的な発展がどこまで続くかと

いう問題が論じられており、19世紀の半ばまで続くという見方が有力である。

我々は植民地化の開始をもって、インドの近代が始まったと考えてきた。ところが、最近の論調は、植民地化の持った意義というものを比較的低く見て、社会経済史的な観点から見れば、もっと違ったところで時代区分ができるといっているわけである。ただベンガルについてはこうした見方はやや無理があるといわざるをえない。ベンガルはイギリスの植民地化の波を正面からかぶった地域であり、このインパクトの大きさを軽視することはできない。しかしベンガル社会の変化を長期的に見ると、やはり18世紀にできた枠組みが植民地化の時期に切断されるのではなく、持続的に受け継がれていく面があるのは否定できない。植民地化の時代、つまり18世紀の後半、西欧の近代がインド社会を完全に圧倒することはできないわけで、インド社会の側にも発展する力があり、これに抵抗していく。西欧近代のインパクトはインド社会の中に、折れ曲がりながら吸収されていく。あるいは西欧近代とインドの18世紀的な発展とがお互い相互作用を起こしながら、長い間の融合過程を経て、おそらく19世紀の半ばくらいには、植民地社会が形成されると理解する。こう見ると、17, 18世紀の発展を重視する論調は納得がいくわけである。

2. 土地所有制の展開過程

18世紀から19世紀にかけてのベンガルにおける土地所有制の展開というテーマを、イギリス側の政策とインド側が持っていた固有の条件との相互作用の過程として分析し、そこにどういう特徴があったか見てみたい。

ところで、この時期にベンガル農業の発展ということがいえるのだろうか。18世紀の後半は、ベンガル農業の混乱期であり、1770年には未曾有の大飢饉があった。これはイギリスがめっちゃくちゃをしたためで、人口の3分の1が死んだといわれている。しかし18世紀から続く持続的な傾向というものがあった。それは商業的農業の展開である。例えば、商人が農民に前貸しして米作をさせる形の農業は、ベンガルでは18世紀に始まった。そういう前貸し生産は米だけではなく、サトウキビ、タバコ、綿花等に広がっていた。その動きは18世紀後半の混乱の中で一度途切れるが、その後ベンガル農業はイギリスとぶつかった衝撃から、急速に回復していった。19世紀に入ると商業的農業は藍作やジュート作へと拡大していった。藍作は深刻な問題を引き起こしたが、米とジュートは植民地的な搾取ばかりとはいいきれない側面を持っていた。また18世紀の後半にはベンガルの3分の1は荒蕪地だったが、20世紀に入る頃までには、耕作可能な土地は開墾し尽くされていたと考えられる。19世紀はベンガルの大開墾時代だったわけであ

る。ところがベンガル農業は20世紀の初頭には停滞期、あるいは緩やかな下降期に入った。まず開墾のフロンティアが消滅してしまい、1910年代、20年代から人口爆発が起こってくるのである。

そういうふうに進捗したベンガル農業の発展に土地制度上の枠組みを与えたのが、ザミンダーリー制である。ザミンダーリー制というのは、ザミンダールからきた言葉で、ザミンダールは大地主、領主層と考えてよい。その下にライオットと呼ばれる農民がいた。イギリスはベンガルの植民地支配を始めたときに、ザミンダールに土地所有権を賦与し、ザミンダーリー制という土地制度を施行した。これが1793年のことであるが、ザミンダーリー制は独立後、1950年代に廃止されるまでベンガルの土地制度の基本的な枠組みを作っていた。

そこでザミンダーリー制の展開を、ベンガル農業の発展との関連で大まかに話したいと思う。

まず18世紀、つまり植民地化に先立つ時代、すでにベンガル地方においては、緩やかに階層化された土地制度が形成されていた。その原因は徴税請負であるとか、いろいろな職務を果たす人にそれに対する報酬として土地を与えたりとか、あるいは宗教的施設に対する寄付とか様々で、それらが緩やかな階層的な秩序を作っていた。ザミンダールは18世紀までは治安、警察権などを持っており、領主的な性格を強く持っていた。だが他方ではこのザミンダールの権利は、売買、質入れすることができ、そこに一つの特徴があった。またこの時代、巨大なザミンダールであっても直営地を営営しており、そこに農民を入れて刈分小作をさせていた。つまりザミンダールは領主的な性格を持ちながら、その領主権自体は売買、質入れ自由という状態にあったわけである。ボルドマンという所領を例にとると、この所領はベンガルの10分の1を含む巨大なものであった。そこで請負に出す。第一段階の請負人がサダル・ムスタジュール、第2段階がクトキナダールと呼ばれた。この所領は徴税請負という形で2段階に整理されているが、実際の状態はおそらくもっと複雑で、様々な権利を持った有力者がいたものを、この2段階に整理したのだらうと思う。この請負人の下にいたのがライオット（農民）で、彼らは実際に耕作を行い、保有地に対する慣習的な権利を持っていた。

1780年代の検地帳によれば、それぞれの農民が持っている保有地の面積は、大きくてもせいぜい20～30エーカーで、それほど大きな保有地は成立していなかったと思われる。しかし特徴的なことは、ライオットの下に下級ライオットとか、バルガダール（刈分小作人）がいて、土地に対する権利が耕作者のレベルですでに分化していたことである。ただしライオットの権利はザミンダールとは対照的に売却はできなかった。

18世紀の状態は以上のようなものだった。つまり、ザミンダールは領主であるとも、地主で

あるとも、断定しにくい複雑な性格を持っていたが、いずれにせよ、イギリスが後に導入する所有権に近い権利を持っていたことは確かである。また18世紀の状態についても一つ重要な点は、土地に対する権利が垂直的に分化し、階層化していく傾向がすでに見られることである。しかもこの垂直方向に働く力は、ザミンダールのレベルのみならず、ライオットのレベルでも作用していた。

こうした状態のところに、1793年にザミンダリー制が施行されるわけである。そこには当然植民地的収奪の問題があるが、今日はベンガル農業の発展との関わりで問題を分析してみたい。その際、1793年、19世紀前半、19世紀後半と分けるのがいいと思う。それぞれの段階においてベンガル農業の課題というものがあつた。イギリスの植民地権力は、社会経済政策においては日和見主義的で、状況の後についていく傾向が強かったといえる。1793年にはザミンダールをイギリス的な地主とさせるべく、ザミンダールに所有権を賦与した。19世紀前半にはプランテーション農業の展開が問題の焦点であつた。この時期にはヨーロッパ移民によるインド開発論が盛んで、その条件を作らなければいけないという課題があつた。しかしこのプランテーション農業による開発政策は結局潰れて、一部を除きプランだけに終わった。19世紀後半にはジュートと米を中心にした小農経営を基盤にした商業的農業を推進するのが課題で、植民地政府はそれを支えるために土地法を整備した。

1793年にザミンダールに土地所有権を与えた政策が、何を意味したかということ、それはザミンダールの権利以外の権利は一切無視したということである。したがって18世紀の末にあつた様々な土地に対する権利は、括弧に入れられてしまった。しかも後見庁というものが存在して、さらにザミンダールの所有権を強めていたことを見落としてはならないと思う。後見庁はザミンダールに子供がいなかった場合、あるいはザミンダールの経営が立ちいかなかった場合、植民地政府の判断で植民地政府が経営を肩代わりして、経営を建て直すための官庁である。だから、ザミンダールは一応土地所有権者とはされているが、それは植民地政府の後ろ楯を持ったものであつたわけである。

19世紀の前半の動きとして重要なのは永代借地条例（パトニ条例）の制定である。この法律で植民地政府は、ザミンダールの地所を永代的にしかも定額地代で貸し出す、それを又貸しする、更にまた又貸しするということを認め、そこから生じる厄介な問題を処理するために法制上の整備を行った。こうして、又貸しが認められた結果、19世紀の半ば過ぎまでにはパトニダール、ドパトニダール等と呼ばれる様々な名称を持った中間的な土地保有権者が、ザミンダールとライオットの間に階層を成して存在するようになった。そもそも植民地政府としては、

ザミンダールの下でプランテーションのような借地農業を行なう階層を育成するために、永代借地条例を制定して借地権を強くしたわけだが、借地農業はベンガルでは発展せず、むしろ又貸しが3段階、4段階と続いていくような独特の土地制度が形成されることになった。これをベンガルの土地制度史の用語で subinfeudation（転封）と呼ぶ。

19世紀後半にジュート作を中心に商業的農業が展開すると、それを栽培する農民の権利が問題になった。そこでベンガル借地法が制定され、農民の権利が確立され、事実上、農民保有地の売買が認められるようになった。その結果、農民的な土地市場が成立し、農民の保有地の売買が急速に拡大して、農民層が分解し、刈分小作農（バルガダール）が生まれてくるということになる。

以上が18世紀から19世紀後半までのベンガルの土地所有権の展開のあらましである。つまり18世紀に緩やかな階層を成して存在した様々な土地に対する権利は、1793年にザミンダールの権利を除いて全部括弧に入れられ、無力化してしまう。それを植民地政府は、その時々ベンガル農業の課題に応じて再編しながら復活していく。その結果、括弧に入れられたところが、形をある程度変えながら息を吹き返してくるという過程がずっと見られる。だから全体的にみると、18世紀にできた枠組みが持っていた力は強かったと言って良いと思う。それが土地所有権の設定というかなりの荒療治にもかかわらず、19世紀の後半に18世紀の構造と似た構造がベンガルの社会にまたできあがってくることを理解するカギになると思う。

3. 構造的な特質

さて、ベンガルにおける土地制度の発展に見られる構造的な特質とは何だろうか。まず第1に subinfeudation をあげることができる。Subinfeudation というのは、ザミンダールの権利、つまり土地所有権を頂点にして、土地に対する権利が何段階にも分化していく垂直的な運動を指す言葉である。その原因は何であったか。一つには、ザミンダールが政府に納める土地税が永代定額とされていたので、ベンガル農業の生産力がだんだん上昇してくると、ザミンダールの手に残る剰余がどんどん増えていったことがある。イギリス側は、ザミンダールは農業発展のためにその剰余を投資するだろうと期待したが、ザミンダールの側はこれを subinfeudation 行うという形で消費し、ある程度収入は減らしても安定した年金生活者化する道を選んだ。その結果、植民地化に先立つ時代に形成された土地制度が、権利の内容がある程度変化し、再編成されながら、しかし、植民地権力が整備したしっかりした法制と裁判所という制度的な裏づけを得て固定化されたといえる。

ところで、18世紀から19世紀にかけてのベンガルは、非常に社会的流動性の高い社会だったと思う。社会変動が非常に激しかったわけである。この流動性をベンガル社会がどういうふうにして吸収し、新たな秩序を作り上げていくかということだが、植民地的な条件の下では、政治権力の再配分ということは考えられなかった。18世紀末から19世紀まで、イギリスが政治権力を独占する傾向は強まりこそすれ、弱まることはなかった。それではカースト秩序の再編はどうかというと、経済力をつけたカーストがカースト上昇運動を行ったのは確かである。しかし、これは組織力があるし、時間もかかるわけで、成功したカーストの数はそれほど多くない。むしろ私は、土地所有に伴う社会的威信、そこから生ずる経済的収入を subinfeudation を通じて分配していくことで、ベンガル社会は当時の社会変動の波を吸収したし、植民地政府はそういう方向に誘導したのだと考える。

Subinfeudation は、社会的に上昇してくる人間を、ベンガル社会独特のやり方で吸収し、秩序づけていく方法であった。Subinfeudation は、直接生産者から搾り取ったものを分配していく機構という経済的側面もちろん持っていたが、在地における支配被支配の関係、あるいは宗教等の文化的な秩序を、土地に対する権利を軸にして結晶化していく働きも担っていたと考えられる。ベンガル社会における土地に対する権利、別の言葉で言えば、農民から取った余剰を分配していくシステムは、ただ単に経済的な意味合いを持っていただけではなく、社会的、文化的な意味合いをも担っていた。だからこそ、19世紀の後半に至るまで、subinfeudation が大々的に、しかも極度に精緻な形で行われ（これをギアツの言葉を借りて「土地権益のインヴォリューション」と呼ぶこともできよう）ベンガル社会の秩序を考える上で非常に重要な意味を持つようになったのだと思う。

もう一つ指摘しておきたい構造的な特質は、今日はあまり触れられなかったが、農民の権利に関係する。先ほど農民の権利は18世紀には売却できず、売却できるようになったのは、1885年のベンガル借地法によるといった。したがって、ベンガルの土地市場は、ザミンダールの権利は自由に売買しながら、農民の権利は売買されないという、おもしろい構造を長い間持っていたわけである。それは一つにはベンガルの村落共同体の問題があった。例えば、南インドとか西インドでは村落共同体が強く、共同所有者である農民の権利は、ワタンとかミラースという言葉で呼ばれ、それらは18世紀から売買されていた。ところがベンガル農村社会にはそれに相当するものがない。ベンガル社会では、共同所有が解体して、そこから土地の売買が広がっていくというコースを取り得なかったわけである。ベンガルではいつ頃から農民保有地の売却が始まったのかというと、19世紀の後半からである。純然たる農民保有地の売買は19世紀の第

4クォーターぐらいから一般化していく。村落共同体の弱さがベンガルでは連綿としてあり、農民的土地所有が成立し、農民の保有地の売却が一般化するのが遅れたと考える。これに関連してもう一つ言っておきたいことがある。それはザミンダールと農民の関係の特質についてである。両者の間には親子の関係になぞらえるような家父長的な関係が濃厚にあり、それが20世紀に至るまで維持されていた。したがって、ザミンダールはよそ者が自分の所領の中に入ってくるのを好まない。売買すればよそ者が入ってくるから、それに反対するという構造があった。またザミンダールは農民と共に土地を支配するわけだが、ザミンダールは荒蕪地、市場、農民の屋敷地、更に経済的な価値のある立木に至るまで、つまり文字通りあらゆる土地を所有していたことも重要である。農民が共同体を作ろうと思っても、共同所有地すら存在しなかったということである。農民保有地の売買が遅れた背景として、ザミンダール＝農民関係の特質を考えておかなくてはならない。

4. 地帯的な特質

最後にベンガルの農村の構造の歴史的な特質を抽出する時に、どこら辺に目をつければいいのかということを地帯区分の指標ということで触れておきたい。問題点だけ挙げると、地主直営地、農民保有地、刈分小作地という農地制度の問題があり、地主（ザミンダール等）、富農（ジョトダール）、小農、刈分小作人（バルガダール）、農業労働者という階級構造の地帯的特質がある。またそれだけではなく、カーストの問題（たとえば上位三カースト、中間カースト、下位・不可触カースト、部族民の構成比）、宗教的な問題（ヒンドゥー教、イスラム教、仏教、アニミズム）、地理的な条件の問題（東ベンガルと西ベンガルでは相当異なる）がかなり重要な位置を占める。そういうところまでやって、初めて地域性ということを考えることができると思う。また発表の準備をしながら思ったことだが、本日のテーマの「発展の地域性」という問題は、植民地においては、植民地の条件というインターフェースを一つ入れないと話しづらく、直接的に「発展と地域性」というのはなかなか繋がらないという感想を持ったことをつけ加えておきたい。

コメント

水 島 司

2つの重要な点だけ話す。まず、階層化の問題である。階層化ということを一般に考えると、単に土地への権利だけが階層化の指標になるわけではない。インドの場合には、それぞれのカーストによって、様々な形でのアスピレーションがあったのではないか。例えば、洗濯人カーストは、基本的には土地の耕作から排除されている。では、洗濯人カーストのアスピレーションは一体何処に向けられたのか。18世紀までのアジア社会に、多元的な多様なアスピレーションがあったのではないか。インドの場合、例えば左手カースト、右手カーストグループが結婚のときに柱を何本立てるかという我々から見ればつまらなく見えることで、都市部を中心にして殺し合いをやる。つまり我々が考えているアスピレーションの方向とは別な形があり、耕作とか土地への関わりを主要な生き方としていない多くのコミュニティがインド社会には存在したわけだ。土地への権利にのみ視点を置くと、そうした彼らの生き方がすっぱり抜け落ちてしまう。

例えば、私が調査した南インドの村には、ガウンダーという羊飼いカーストがいる。インドではカースト差別のことを、土地所有の視点から見てしまうが、1860年代の資料では、不可触民もこのガウンダーも土地所有はゼロに近い。ところが19世紀後半から急速にガウンダーが土地所有へ向けて一気に走り出す。別の例では、ムットゥリアンという農業労働に従事するカーストがあり、これも土地所有という点では低い位置にあり、私もあまり素姓の良くないカーストであろうと思っていた。ところが、ある機会に彼らは彼らで戦闘集団として非常に高い位置にあったのであり、どちらが高いとはいえないという説明をインド人の歴史家がしてくれた。とにかく階層化一つをとっても、多元的な考え方がありうる。

19世紀後半からベンガルでも土地売買が頻繁に行われて、法制的な変化とライオット権の確立という状況が表裏一体になって進んできた。しかし、その過程で、インド社会が本来非常に多元的に持っていたはずの方向性が土地に向かってしまうということが起きたのではないだろうか。彼らの動きが土地所有へと画一化されてしまうところに、近代のアジアの抱える貧困の根があるのではないか。階層化一つの問題をとっても、近代以前にまで階層化を考える時には、より多元的な視点を取り込む必要がある。そうした試みによって、地域発展の固有性とか、時代のイデオロギーというものが浮かび上がってくるのではないか。

2番目の問題だが、これが第一の最後の点と関わってくる。つまり、いろんな人がアスピ

レーションを持ったとしても、そういうものが現実化されうるかどうかを規定してしまう条件がある。中里さんがおっしゃったように、大きく分けると、市場原理にのっとる市場的な条件と歴史的な環境、つまり非市場的な条件の2つである。特にその後者が重要である。例えば、カーストを単位とした支配・非支配関係、あるいは村落支配構造がそうであって、例えば、村落支配構造にのっとってザミンダールの支配がある場合、土地の権利が売買されないようにすると、上級農民の安定が図られ、よそ者が入り込まず、結局その支配が安定する。ザミンダールの家父長的な関係とか、非市場的な要素は、こうしたアスピレーションを方向づけするときの大きな制限、大きな力になって機能している。

もう一つ、ザミンダールの出自について中里さんは書いてらっしゃるが、その中で、彼らがかつて国家の徴税機構に組み込まれることによって、国家による富の再分配に入り込むことができたということを重要視されている。このような国家の持つ非市場性は、今日のアジアの諸国家において、開発行政とか統制行政への関わりが富の分配とかなり関わっているという点に連なっており、その意味で極めて現代的な問題だろうと思う。

最後に「発展の地域性」というのは、どうも地域というものを運動体として考えないとよく分からない、しかもその運動体というのは、非市場的ないろんな歴史的な条件を背中に背負っており、そこにこそ地域発展の個性が出てくるように感じられるという点をつけ加えておきたい。

質疑応答

加納 いまの報告の内容との直接の関係はないが、アジアからヨーロッパへの米の輸出について、18世紀の末から19世紀の始めにかけて、イギリスが輸入している米の最大のソースはベンガルで、19世紀に入るとビルマの方の輸出がずっと大きくなっていくが、1860年代に入っても、ベンガルから米の輸出が続いている。ベンガルが米の供給余力、輸出余力を持つという状態はいつごろまで続いたのか教えてください。

中里 ベンガルからイギリスへ米が輸出されていることは貿易統計を見て知っていたが、ベンガルの米の輸出余力は、調べたことがないので分からない。

水島さんのコメントに関しては、18世紀までは、インド社会の流動性ということを使うのなら、それは多面的な方向性を持っていたのだから、土地所有による階層化を論じるだけでは不十分ではないか、というご指摘だと理解する。この点については私も同意見であ

る。ただ今日の話は土地制度ということなので、こういう話をした。次にインドのカースト制度についてはかなり地域的な差があることを指摘しておきたい。水島さんが研究しておられる南インドとベンガルでは相当違う。たとえばベンガルにチャーシードーバーというカーストがある。チャーシーとは耕作者という意味で、ドーバーは洗濯人カーストを指す言葉である。つまり耕作をする洗濯人カーストが存在するわけで、かなり低いカーストの者に至るまで、ベンガルでは土地を持っている。もう一つ例を挙げると、先ほどお話しした1780年代の検地帳によると、ムチというカースト（皮革工）、ハーリーというカースト（清掃人）のように不可触民の中でもひときわ不浄性が高いとされている人たちも、小さいながらも土地を持っていた。だからベンガルでは土地制度の枠内で彼らの持っているアスピレーション、上昇志向はある程度カバーできたと思う。それと18世紀後半から、

社会の方向性が土地に向かってくるというのは、おっしゃる通りである。社会的流動性が上がってきたとき、いろんな可能性があるわけだが、結局土地に向かっていくということである。

市場的な力、非市場的な力ということに関連しては、インドでは非市場的な力が重要であるが、それはインド社会の特性であるとともに、植民地支配の特性でもあったことを指摘しておきたい。つまりイギリスはレッセフェールをいいながら、実際にやっていたことはかなり異なる。例えば、植民地政府が自由であるべき土地市場に後見庁を使って介入し、ザミンダールの地所の解体を防ごうとした。それはインド支配を維持するために必要だったからである。インド社会固有の条件と植民地支配の条件の両方を見ながら、非市場的な条件も入れてインド社会の動態を分析しなければいけないと思う。